

# 開発プロジェクトの地域住民への社会的影響

## —北部タイ山岳民族を例として—

原 田 一 宏

### 1. はじめに

1995年10月から11月にかけて、タイ北部のいくつかの山岳民族の村を訪れた<sup>(注)</sup>。タイ北部周辺は、タイ、ミャンマー、中国の国境にまたがって、モン人、ラオ人、ヤオ人、リス人、アカ人、ラフ人などの多くの少数民族が入り交じって生活しており、複合社会を形成している。どの少数民族も、以前は、自然と調和した伝統的な生活を営んでいたと思われる。しかし、近年では、この地域に、タイ、オーストラリアをはじめ、様々な国の村落開発プロジェクトが普及することによって、人々の生活は大きな変容を迫られている。

今回の調査では、これらのプロジェクトがモン人、カレン人、ラフ人の村の社会構造や経済構造に及ぼした影響を調べるため、聞き取り調査を行った。本稿では、モン人、カレン人、それぞれ1つずつの村を取り上げ、プロジェクトが彼らの生活に及ぼした影響について、エッセイ風に報告する。

### 2. モン人の村

#### 開発の進んだ村へ

私達はチェンマイでライトバンを借り、モン人の村へと向かうこととした。虫よけスプレー、非常食、水、ポカリスエットなどをザックに詰めていよいよ出発である。車は、村での昼食、村人たちへのおみやげを載せて、軽快に走り始めた。チェンマイ市内の車道は、片側二車線で、非常に走りやすい道路だ。道の両サイドには、様々な店が立ち並んでいる。少し郊外に行くと、日本の2,3倍はあろうかという大きなガソリンスタンドが、次から次へと視界を横切っ

---

HARADA, Kazuhiro : Social Influence of Development Projects on Hill Tribes  
in North Thailand

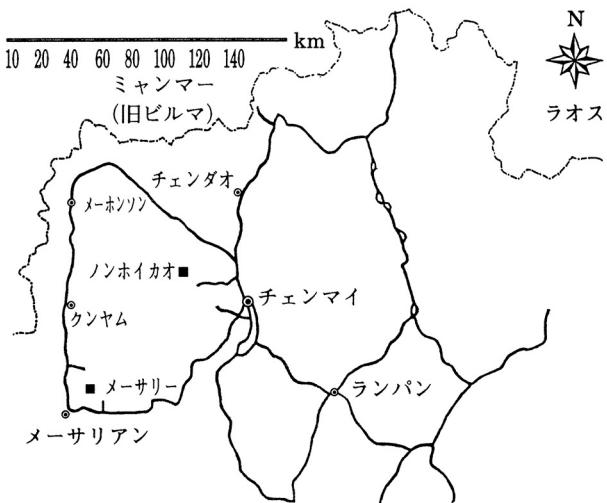
東京大学農学生命科学研究科博士課程

ていく。私達の車は、ガソリンスタンドでしばしの休息をとり、再び走り始めた。

大通りを西に曲がって、山間の舗装された道をくねくねと登っていくと、チェンマイを出て1時間もたたないうちに、目的の村であるノンホイカオ村に到着した。山岳民族の村はかなり山奥にあり、険しい道を通ってやっと到達できるような所にあるというイメージがあったので、これほどまでにあっさり到着してしまうとは少々拍子抜けであった。私達はこの村の小学校の前に車をつけた。

### モン人とは

モン人は、現在約8万2000人おり、カレン人について2番目に人口が多い。タイではチェンライ県・ナーン県・パオヤ県・チェンマイ県・ターク県など広い範囲に居住している。彼らの起源は、中国にあるといわれており、19世紀の後半に、中国からベトナム・ラオス・ビルマ(現在のミャンマー)・タイに移住した。言語的には、オーストロ・タイ語派のミャオ・ヤオ系諸語群に属している。モン人は独立心が強く、現在でもタイ政府による統治に抵抗している。宗教は、伝統的にはアニミズムであったが、現在ではキリスト教徒や仏教徒もいる。



タイ全土地図

る<sup>1)</sup>。この村は、圧倒的に仏教徒が多かった。

### 村の概要

私達が訪れた村は、メーラム区ノンホイカオ村で、世帯数は 78 である。タイ王室プロジェクト (Thai Royal Project) の影響により、村の開発はかなり進んでいる。山岳民族への援助、ケシ栽培の撲滅、森林や水源といった自然資源の破壊を減少させることができたが、このプロジェクトの主な目的である<sup>4)</sup>。

モン人の住居は平戸間式であった。壁は竹を縦に編んで作られ、屋根はフタバガキ科の葉または藁で作られていた。しかし、プロジェクトの影響であろうか、トタン板で作った屋根もあちこちで見ることができた。

一般的に、モン人は自尊心が高く、自らの伝統を誇りに思うため、黒い生地に赤い刺繡の入った民族衣装を現在でも着用することが多い。実際、ノンホイカオ村以外のモン人の村で、女の子が家の外に木でできた小さな椅子を持ち出して、無心に刺繡をしている光景をよく見た。

### 村人たちの生活

今回調査した 21 戸のうち、8 割前後の世帯がテレビ、ラジオを所有していた。中には、冷蔵庫を所有している世帯もあった。小型トラックをもっているものも多かった。これは、収穫した商品作物をチェンマイまで輸送するために使われる。また、この村には送電線が通じていた。このように、この村にはプロジェクトがかなり普及しており、物質的には非常に恵まれている。村によつては、このプロジェクトによって、イチゴ栽培にスプリンクラーが設置されているところもあった（写真 1）。

モン人は、焼畑でケシの栽培をすることによって、高い現金収入を得ていた。1983 年には、モン人の村のうち 60% 以上がケシ栽培を行い、リス人に次いで

現金収入が高かった<sup>3)</sup>。この村でも例に漏れず、以前は焼畑によるケシ栽培が行われていた。しかし、タイ政府がモン人のケシ栽培を撲滅するために、焼畑から商品作物へ転換させるプロジェクトを行ったため、現在では、一戸当たりの平均焼畑面積は約 0.3 ライ（約 0.05 ha）に過ぎない。しかも、彼らは同じ土地で 2~3 年耕作し

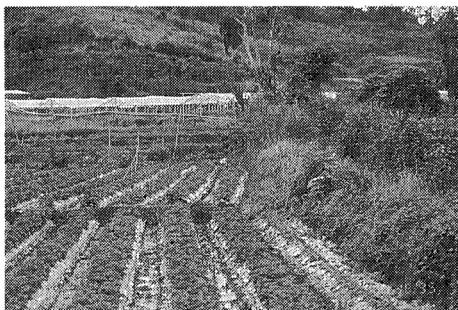


写真 1 スプリンクラーを用いたイチゴの栽培

た後、他の場所へ移動し、休閑期を3~4年おいてもとの場所へと戻ってくるという極めて収奪的な焼畑を行っている。

一方、常畑の面積は約10ライ(約1.6ha)と焼畑に比べてかなり広い。常畑で生産されている商品作物はキャベツが多いが、それ以外に、人参・レタス・白菜も栽培されていた。人参や白菜のよう

な商品作物の栽培は、開発がかなり進んでいる村にしか見られない。人参は5月に播種して8月から9月にかけて収穫し、レタスは7月に播種して10月に収穫する。収穫された商品作物は、キャベツの場合はチェンマイなどの都市に運ばれる(写真2)。キャベツのように大量に栽培される作物は、チェンマイなどからの商人によって、畑ごと購入されることもある。このように、この村には常畑において大規模に商品作物が導入されており、商品作物による月平均収入は8,000バーツ(32,000円)と今回訪れた村の中で最も大きかった。このような商品作物の畑では、土壤流亡防止のため、等高線上にエレファントグラスを植栽している。昼休みに、民族衣装を着た子供たちが一斉に校庭に出て来て、バレーボールに興じたり、はしゃぎ回ったりしていた。この村の小学校では、観光目的のために、制服として民族衣装を着用することが義務づけられている。校庭の片隅では、カメラやビデオカメラをもった観光客が、子供たちの行動をじっと見守っていた。小学校の入り口では、モン人の老女が大きな浅いかごに、ネックレスや腕輪や指輪などをいっぱい並べて、村を訪れる観光客に、これらの商品を一生懸命買ってもらおうとしていた。私達が村人の聞き取り調査をしているときにも、タイ人に引き連れられた数人の観光客がどやどやと無神経に家の中に押しかけてきた。この村にも着々と観光の波が押し寄せているのが感じられた。私には、観光によって彼らの大切なものが失われることのないよう祈ることしかできなかった。

### 3. カレン人の村

#### 未開発の村へ

私達が訪れたチェンマイ周辺のほとんどの村では、自給用作物を栽培する循



写真2 キャベツの積出し

環型で環境調和的である伝統的な焼畑は、大規模プロジェクトの影響を受けて、ほとんど行われていなかった。そこで、私達は、ミャンマーの国境に近い都市メーサリアン周辺の村において、比較的伝統的な焼畑がまだ営まれているという情報をタイ政府から得て、チェンマイから一路西へ向かった。

4時間ぐらいひたすら走りつづけた頃、車は北へ曲がり、山へと続く未舗装の道に入って行った。しばらく行くと視界がぱっと開けた。車の窓越し左前方に、山の斜面に延々と畑が続く光景が現れた。車が次第に畑に近づくにつれて、キャベツ・豆・トウガラシなどの商品作物が植えられ、それらの間に、まばらに陸稲が植えられているのが目に入った。この地域にも、かなりの商品作物が入っていたのだ。日本製のトラックの積み荷に、次から次へとキャベツが運び込まれ、トラックより高く山積みにされていった。

私達は、畑で働いていたカレン人の家族に話を聞くことにした。彼らは、幅4mはあろうかという青色のマットの横に、刈り取ったばかりの稲を積み上げ、その中の一束の稲をつかみ、マットに叩きつけていた。彼らに近づくと、私達はおもむろにアンケート用紙を出し、質問を開始した。初めのうちは、彼らも仕事をしながら、快くとはいわないまでも、私達の質問にある程度答えてくれていた。なんだか彼らの様子が少し変だと感じたのは、話し始めて10分ほど経ったころだった。突然、彼らが家族同士でなにかわめき叫んだとたんに、手にしていた稲を放り投げて、後ろも振り向かず、斜面の下へ向かって逃げるようの一目散に下って行った。私達は、一瞬何が起こったのかわからず戸惑った。通訳のタイ人にどうしたのか尋ねてみた。彼らがカレン語で話していたために、タイ人にもはっきりと事情はわからなかつたらしいが、どうも私達が怖かったということだった。考えてみれば、仕事をしている彼らに対して、きちんとした説明もせずに、ぶしつけに聞き取りを始めた私達の行為に対して、彼らが恐れるのも無理はなかっただろう。何しろ、私達は総勢8人の大挙をなして、彼ら3人を取り囲んだのだから…。私達は、気持ちが焦っていたために、相手のことも考えず、ずけずけと相手の気持ちに踏み込んでいったのだ。

修士課程の2年間、造林学研究室に所属し、インドネシアの熱帯林再生のための基礎的研究を行ってきた。生態系の保全を考える際、森林を再生することは非常に重要なことは疑う余地はない。ただ、その地域に居住している人がいる限りは、彼らがそこで長年営んできた生活様式を充分に認識する必要がある。彼らの生活を知った上で、彼らにとって森林再生がどのような意味を持つのか、どのように役立つか、ということを常に考えていかなければならぬ

い。熱帯林再生という課題は、地域住民にとって有益な形で行われてはじめて解決されうるものである。インドネシアで研究しているうちにそんなことを考え始め、博士課程では、林政学研究室で森林と共に生きる人々の生活を詳細に調査してみようと決心した。インドネシアで研究していた際、地元の人々と日常的に接することがよくあったため、自分では異文化の人々への接し方というものをある程度心得ているつもりであった。しかし、実際には、今まででは、彼らと単なる友達として接しただけであり、今回のような聞き取り調査におけるインフォーマントとして接するというのは初めての経験であった。そのため、今回のような不用意な接し方をしてしまった。この出来事をきっかけに、改めて、聞き取り調査の難しさを実感した。

私達は気を取り直して、さらに奥にあるというカレン人の村を訪ねることにした。30分ぐらい走り続けて、目的の村に到着した（写真3）。

### カレン人とは

カレン人は、タイ山岳民族の中では最大の人口約27万人を有し、チェンマイ県・メーホンソン県・ラムプーン県・カーンチャブリー県などのタイとミャンマーの国境周辺の山岳地帯に居住している。彼らの起源については定かではないが、チベットのモンゴロイド系の系統ではないかと考えられており、他の山岳民族とは民族的には遠い関係にある。13世紀からビルマ（現在のミャンマー）に居住し、18世紀にタイへと移住してきたといわれている。言語的には、シナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、カレン語群に属している。宗教は、伝統的にはアニミズムであったが、現在ではキリスト教徒や仏教徒も多く<sup>1)</sup>、私たちが訪れたこの村も、キリスト教徒と仏教徒がほとんどであった。

### 村の概要

私達の訪れた村は、メーホー区の5つの村の一つのメーサリー村で、世帯数は21である。この村は、主に、タイ-オーストラリア高地農業および社会開発プロジェクト（Thai-Australia Highland Agricultural and Social Development Project）の影響を受けている。環境を保全しつつ、商品作物の栽培の促

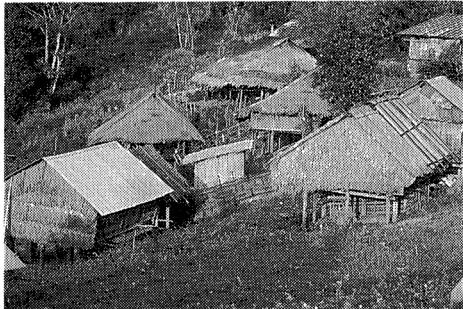


写真3 カレン族の集落

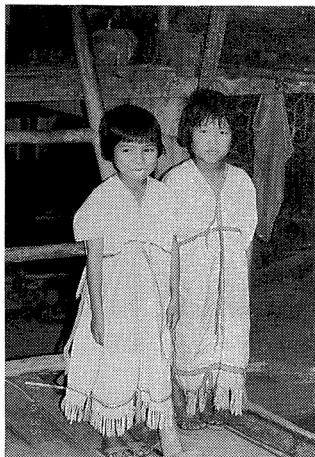


写真 4 カレン族の少女

進、インフラストラクチャーの整備によって、山岳民族の生活条件及び生活水準を改善し、経済的水準を向上させることが目的である<sup>5)</sup>。今まで訪れた村とは違って、この村はプロジェクトの影響はまだそれほど大きくないうようだ。伝統的なたたずまいがそれを物語っていた。私達が嫌われたからなのか、私達が村に到着し歩き始めると、みんな一斉に家の中へと逃げ隠れた。

彼らの住居は、高床式で床は地上から約2mぐらいの所にあり、屋根は藁葺きが一般的である。家の下で、ニワトリがはしゃぎ回っていると思えば、その横では、牛がけだるそうに尻尾をぶらんぶらんさせている。向こうの丘では、わがままな牛を、女の子が一生懸命なだめようとしている。母親と子供が、山で取ってきた薪を黙々と運んでいる。今まで訪れた村とは何か違う、何ともどかな光景が、この村にはあった（写真4）。

### 村人たちの生活

開発プロジェクトがかなり入り込んでいる他の村と違って、この村の地域の人々は、テレビ、ラジオ、冷蔵庫等の電化製品をほとんど持っていないかった。送電線もまだ通じていないため、ほとんどの家では石油ランプを使っていた。聞き取り調査が夜遅くまで長引くと、老人がろうそくを持ってきて、手元を照らして明るくしてくれた。炎越しに老人の顔をじっと眺めながら、なんともいえない心のぬくもりを感じた。

年平均収入は750バーツ（約30,000円）と少なく、貨幣経済の浸透はそれほど大きくはなかった。したがって、この村の生業は、商品作物栽培よりも自家消費栽培を重視した焼畑農業中心であった。また、カレン人は一般的に水田も所有するといわれているが<sup>2)</sup>、この村にも、水稻を作っている世帯が若干あった。

商品作物は、主にキャベツが作られている。キャベツの栽培は、12~5月と6月~11月の年2回収穫する。このサイクルを2~3年繰り返した後、別の所へ移動する。そこで、同じようにキャベツの栽培を2~3年繰り返しを行い、再び元

の所へ戻って来る。地力が衰えるまで継続してこれを繰り返す。こんな方法では、土壤がやせてしまうのも無理がないような気がする。

焼畑では、陸稻・トウモロコシ・キュウリ・カボチャ・レタス・豆などが作られている。ここで、焼畑における陸稻栽培の農事暦について述べておこう。まず、乾季の2月に約10日ほどかけて二次林を刈り払い、そのまま4月まで放置しておく。4月になると、1日かけて伐倒木に火入れを行った後、トウモロコシ・カボチャ・キャッサバの種子を植える。さらに、1回目の火入れの時に燃え残った倒木を集めて、数日後に2回目の火入れを行う（二度焼き）。その後2週間以内に、陸稻を植えるとともに、豆・キュウリなどを植える。6月から10月にかけて3回ほど除草をし、10月に入ると収穫にとりかかる。収穫後、別の畑に移動し、休閑期を7年ほどおいて再び元の所へと戻って来る。この焼畑システムは、休閑期は若干短いものの、1960年代にKUNSDTADTERによって調査されたメーサリアン地区レイカウキー村のカレン人の焼畑システムとほぼ同じである<sup>2)</sup>。モン人が焼畑のための原生林を求めて頻繁に移動するのに対して、カレン人は二次林を焼畑に使うため、モン人ほどには居住場所を移動しない。時には、200年以上の間、同じ場所に居住することもある<sup>3)</sup>。一戸あたりの焼畑面積は約4ライ（約0.6ha）であった。稲以外の作物については、適宜収穫することになる。収穫が終わり、次の伐採の季節が来るまでの期間、村人たちの多くは、他の村人が所有している村の近くのキャベツ畑で、収穫等の賃金労働に従事するのである。賃金は1日あたり約50バーツ（約200円）である。

ある日の午後、私達は実際にこの目で焼畑を見るために、村人と一緒に村から畑まで歩いた。村から距離は思ったより短く、ほんの15分ほどで到着することができた。木の間から視界が開け、山の斜面という斜面に、遠くミャンマーの方まで続いているのではないかと思うぐらいに延々と続く焼畑が目の前に広がった（写真5）。タイ政府が森林破壊の原因だと主張している焼畑とは実際にどんなものであるのか、日本にいては想像もできず、かねがね実際に焼畑を自分の目で見てみたいと思っていた。焼畑を目の前にして、タイ政府が焼畑の現状を野放しにしてお

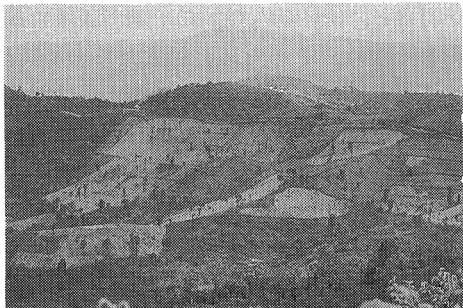


写真5 カレン族の焼畑

くわけにもいかないと納得できた。ただ、彼らはこの地域で焼畑を永続的に行ってきたわけで、その焼畑を一概に禁止してしまうのも最善の策とは思えない。循環型で環境調和的である伝統的な焼畑にある程度依存しながら、商品作物の導入も適宜行うといった、自然と人間がうまく共存できる持続可能な農業のありかたを探っていくべきであろう。私達はコンパスを持ち、この焼畑の面積を実際に測ってみることにした。実際に斜面を下ってみると、目で見る以上に急に感じられた。下るのならまだしも、再び上るのは大変なことだろう。そういう思いながら、私達はどんどん下り始めた。遠くの方で、村の人達が出作り小屋の前で、例の青いシートに稲の束をたたきつけているのがはっきり見えた。彼らが振り下ろす動作に少し遅れて、稲がシートにぶつかるパシッという心地よい音が聞こえてきた。

私達は、下まで来ると今度は上をめざして、ハアハア言いながらひたすら斜面をかけ登った。振り返ると、村の人はさっきより小さく見えた。手を振ると向こうも手を振って答えてくれた。手を振る村人を見ながら、私は先ほど村の若者が言った言葉を思い出した。

「焼畑の労働は確かに大変だし、商品作物を作る方がお金にもなって、いいに決まってる。だけど、焼畑は、代々伝わってきた伝統的なものだ。この伝統を僕たちが絶やすわけにはいかないからね…。」

#### 4. まとめ

今回の調査で、北タイの山岳民族の村には、様々なプロジェクトが普及しており、その影響が山岳民族の生活スタイルに大きな影響を及ぼしていることがわかった。特に、訪れた村すべてにおいて、キャベツなどの商品作物が大規模に導入されているのには目を見張るものがあった。プロジェクトの影響の大きい村ほど、伝統的な焼畑の形態が崩壊すると共に、商品作物による現金収入が大きくなり、そのために村人たちの所持品が豊富になる傾向にあった。プロジェクトの普及によって、確かに山岳民族の生活は経済的に豊かになったが、伝統的な社会システムが崩壊していくのも事実である。メーサリーのような現時点ではプロジェクトの影響をまだあまり受けていない村でも、ノンホイカオ村のような開発の影響を受けている村への単なる移行段階に過ぎず、今後大きく変容していくと考えられる。プロジェクトの影響によって、将来的には、北タイの大部分の村が開発の波に飲まれ、多くの山岳民族が長年に渡って保持してきた独自の伝統が崩壊し、すべてが画一化されていく可能性がある。

政府による開発のプロジェクトはトップダウン方式による上からの押しつけであり、充分な知識がない山岳民族は、山岳民族の生活をほとんど知らない政府による開発によって、政府の言いなりに行動し、完全に自立性を奪われてしまった。このことは、私がプロジェクトに対する彼らの意見を求めた際に、彼らがほとんどといってもよいほど、自分の意見を持ち合わせていなかったことからも明らかである。

開発を行う際には、単に画一的な開発を実行すればよいという考えではなく、開発を行う前に、その村の民族や特性を充分認識し、個々のニーズを熟知した上で、それに適合した柔軟な開発を実施していく必要がある。山岳民族に主体性を持たせたボトムアップ方式の開発が不可欠である。山岳民族のきめ細かなニーズを発掘し、それを実現させるという意味では、彼らの立場に立つことができるNGO/NPOの活躍が今後大いに期待されよう。山岳民族が主体的に行動できる環境を作ることによって、独自に培われてきた山岳民族の多様な文化をできるだけ維持しつつも、彼らの生活を向上させることができると考えられる。

## 謝　　辞

(財)自然環境センターの松島昇氏には、今回のタイ調査の機会を与えていただいた。チェンマイ大学社会人類学研究室のチャイワット先生、タイ王室森林局のスラパン氏には、山岳民族に関する情報を提供してもらった。(財)自然環境センターの木村新氏には、調査において有益な助言をいただいた。林政学研究室の佐賀章子氏には、調査の際、様々な相談にのっていた。タイのチェンマイ大学大学院のみなさんには、調査において通訳をしてもらった。林政学研究室の井上真先生には、このエッセイを書くことを勧めてくださるとともに、様々な助言をいただいた。これらの方々に、この場を借りてお礼を述べたい。

(注) 林野庁の「焼畑移動耕作地域森林造成促進基礎実証調査事業」の一環として実施された「北部タイ山岳民族の焼畑の現状調査」の調査メンバーとして、1995年10月31日～11月22日までタイにて調査を実施した。

〔参考文献〕 1) ANDERSON, Edward F. (1993) Plants and People of the Golden Triangle ; Ethnobotany of the Hill Tribe of Northern Thailand, Silkworm Books.  
2) KUNSDADTER, Peter (1967) Subsistence Agricultural Economics of Lua and Karen Farmers, Mae Sariang District, Northwestern Thailand, Farmers in the Forest, East-West Center. 3) MCKINNON, J. (1989) Hill Tribes Today, White Lotus-Orstrom.